

控物捕次平形銭

恋の郎五八

堂胡村野

庫文空青

一

「親分、近頃つくづく考えたんだが——」

ガラツ八の八五郎は柄にもない感慨無量な声を出すのでした。

「何を考えやがったんだ、つくづくなんて面^{つら}じゃねえぜ」

銭形平次は初夏の日溜りを避けて、好きな植木の若芽をいづくしみながら、いつもの調子で相手になっております。

「大した望みじゃねえが、つくづく大名になりてえと思つたよ、親分」

「何？ 大名になりてえ、大きく出やがったな、畜生ッ」

平次はそう言いながら、楓^{ふうりん}林仕立ての盆栽の邪魔な枝を一つチヨンと剪^きりました。

「第一、お小遣に困らねえ」

「なるほどね、大名衆がお小遣に困つた話はまだ聞かねえ」

平次もそんな事を言うのです。植木に夢中になって、八五郎の哲学などは、どうでもよかつたのでしよう。

「お勝手元不如意ふによいと言ったところで、こちとらのように、八文もんの湯銭ゆせんに困るなんてことはねえ」

「余程困ると見えるな、八」

「へエ、お察しの通りで」

八五郎は、ポリポリ頸筋くびすじを搔きました。

「呆あきれた野郎だ。大名高家を引合いに出して、八文の湯銭をせびる奴もねえものだ」

そう言いながらも平次は、お静を眼で呼んで、あまり沢山は入っていそうもない自分の財布を持つて来させるのでした。

「済まねえ、親分、湯銭と髪銭と、煙草を一と玉買いさえすりやいいんで、——そんなに要りやしませんよ」

「まあ、取っておくがいい。大名ほどの贅ぜいは出来めえが、それだけありや、町内にんじんの人参湯ゆで一日ゆだ茹ゆっていられるだろう」

「へッ、済まねえなあ、——それじゃ借りて行きますよ。ね、親分、お小遣はまあ、親分から借りるとして」

「まだ不足があるのかい」

「大名の話の続きだが、——夏冬の仕着せにも不自由はなく」

「仕着せだつてやがる」

「質屋の出し入れがないだけでも、どんなに気が楽だか解らねえ。その上、出入りはお駕籠、百姓町人に土下座をさせて、気に入らねえ奴があると、いきなり無礼討だ」

「気に入った女は、いきなりしよつ引いてお部屋様だろう」

「そ、それを言いたかつたのさ、ね、親分」

ガラツ八は少し相好を崩して長い顎を撫でます。

「馬鹿野郎、またどこかの小格子の化け損ねた狐のようなにはまり込みやがったんだらう」

「そんな玉じやありませんよ。あつしがしよつ引いて来たいのはまず——」

「煮売屋のお勘子だろう、ちゃんと探索が届いているよ。手前が買いに行くと、お煮」

《にしめ》が倍もあるんだつてね」

「馬鹿にしちやいけません。あんな小汚いのはこつちで御免だ——まずこの八五郎がしよつ引いて手活けの花と眺めたいのは——」

「大きく出やがったな」

ずに煙のごとく消えてしまうのです。

腕も抜群ですが、何よりの特色はその軽捷な身体で、もう一つの特徴は、妨げる者は殺さずんば己まやない、鬼畜のごとき残酷性でした。

盗とられた金は何千両、傷つけられ、殺された人も三人や五人ではありませんが、あまりの神出鬼没ぶりに、銭形平次も手の下しようがなかったのです。

町内では、夜廻りを増やし、時候外れの火の番を置き、鳶とびの者まで動員して、曲くせもの者狩りに努めましたが、冬からの跳梁ちやうりやうを指を啣くわえて眺めるばかり、かつて曲者の姿を見た者もなく、よしんば見た者があるにしても、その場で斬られるのが落ちで、怨嗟えんさと恐怖が、下町一パイに、夕立雲のように拡がって行くのを、どうすることも出来ない有様でした。

「親分、やられましたよ」

八五郎か飛込んで来たのは、その翌日の朝。

「何がやられたんだ」

「中江川さんのところへ、あの泥棒が入りましたよ」

「えッ、そいつは大変だ」

平次は羽織を引っかける隙ひまもなく、草履を突っかけて飛んで行きました。そこからほん

の二三町。

「退いた退いた、見世物じゃねえ」

ガラツ八が群がる野次馬を追つ払う中へ、平次は熱い物のさめない中に——と言つた大あわての調子で飛込んだのです。

「あ、錢形の——よく来て下すつた、この通りの始末だ」

おろおろするのは、主人の中江川平太夫。見事な銀色の毛を申訳ほどの鬘まげに結つて、物を言う度ごとに、言葉のリズムに乗つて、首がブルブルと顫ふるえます。

「あッ、これはひどい」

切り破られた引窓、そこから例いつもの手で、紐ひもを伝わつて、猿ましらのごとく忍び込んだ曲者は、ちようど、目を覚して飛起きた、娘のお琴をひと当て、猿ざる轡ぐつわを噛ませた上、雁がんじ字じがらめにして、そのまま家うち中しゆうを搜したのでしょう、滅茶滅茶にかき乱した中へ、朝の光がうらうらと射し込んで、世にも不思議な対照を見せております。

平次はまだ縛られたままになつている娘のお琴を引起すと、菜切庖丁を持つて来て、バラバラと縄を切りほぐし、それから猿轡を取つて、

「どうなすつた、お嬢さん、——とんだ災難でしたね、——見たこと聞いたこと、詳しく

話して下さいな」

ガラツ八に雨戸を開けさせ、乱れた娘の衣紋えもんまで直してやりながら、平次は物柔かに問い進みました。

「何にも知りません、——気が付いた時は床の中から引出されて、こんなに縛られておりました」

「引窓をコジ開ける音とか、ここへ入って来る様子とか——そんなものに気が付きやしませんか」

「いえ」

娘は美しい顔を上げます。気が緩んだせいか、恥かしい姿を、平次やガラツ八の前にさらした口惜くやしさのせいか、ポロポロと涙が、睫毛まつげに溢れて、少し蒼あおざめておりますが、それでも、存分に豊かな若い頬を濡らします。

年の頃、せいぜい十九、二十歳はたち、無表情で整いすぎて、少し白痴美に近い美しさですが、魂の通った人形を見るようで、それがまた限らない魅力でもありません。

寝巻の上へ袷あわせを引つ掛けて、その上からキリキリと縛られている様子を見ると、暁方あけがた夢中で小用にでも起きたところを曲者に当身を喰わされ、そのまま縛り上げられた顛倒てんとう

のうちに、後も先も忘れてしまったのでしよう。

「それにしても、私があるまで、よく縄を解かずに置いてくれました」

平次は結び目を残して切った細引を、そのまま自分の袖に落しながら、中江川平太夫を顧みました。

「何かのお役に立とうと思つてな、縄を解いたり、雨戸を開けたりしちや、証拠をみんな掻き消すようなものだから」

平太夫は老巧らしくそう言うのです。

「ところで、盗とられなすつたのは？」

「大したことではない。当座の小遣のつもりで、出しておいた十二三兩と、明日本郷の地所を求める約束で、用意した手付が五十兩、合わせて六十二三兩ほどじゃ、——そんな事で済むなら、世間を騒がせるまでもないと思つたがな」

大したことでないと言うのが六十何兩、この浪人の裕福さは、予かねて聞いておりますが、八文の湯銭に困つたガラツ八は、顎を撫でながら平次と顔を見合せます。

「あなたは、何にも御存じなかつたので？」

さんざん荒らされた部屋の中を見廻しながら、平次はこの頼み少ない老人を見やりまし

た。

「耳も眼も遠いから、滅多なことでは気がつきませんよ、——もつとも気がついて、なまじ腕立てなどをしたら、私の身体が危なかつたかも知れない」

「……………」

心細い侍——そんな事を考えながらも、ヨボヨボの中江川平太夫を非難する気にはなれません。

「こんな事を言つては変だが——いや、平次親分だから言うが、金の在あり高だかが知れると私の命がないかも知れない。わずか六十両や七十両で済めば、——」

中江川老人はそう言つて、真つ白な頭をブルブルふるわせるのでした。

曲者の入つた跡から、逃げた出口まで、平次は入念に見廻しました。物置の後ろには九つ梯子ぼしこがあるのに、曲者はそれに気のつかかなかつたものか、物干場から物置の屋根に上り、そこからお勝手の上へ出て、引窓をコジ開けて入つたのは、この曲者の手形のような手順です。

ひさし 庇の上は埃ほこりで汚くなつているのに、家の中に足跡のないのは、用心深く履物を懐へでも入れたのでしよう。お琴を縛つて、次の間を荒らし抜いた上、主人平太夫の寝間は覗いて

も見ずに、そのまま縁側から出たのは、年を取っても二本差などには触れない、いかにも賢いやり口です。

「脅かすわけじゃありませんが、この様子じゃ、もう一度入るかもわかりませんよ」

平次は一通り見た上で、こんな不気味なことを言うのでした。

「そんな事は？」

中江川平太夫はさすがにギョツとした様子です。

「用心なすつて下さい」

「私はこの通り身体がきかないから、氣ばかりあせっても、何の役にも立たない。女子供じゃ、泥棒の入った後へ来るのは氣味が悪いだろうし、——若い者じゃ、娘があるから泊めるわけに行かない。お氣の毒だが平次殿、しばらくここへ泊つては下さらぬか、錢形の親分御宿おんやどと聞いたたら、石川五右衛門いしかわごえもんでも寄り付くことではあるまい」

そんな洒落しゃれを言いながらも、中江川平太夫は泣き出しそうでした。

「そんなわけにも参りませんが、どうでしょう、この男を泊めて下さつちや、——年は若いが、これなら女護にょごケ島しまへ転がしておいても大丈夫で」

平次はそう言いながら、ニヤリニヤリとガラツ八の鼻を指すのです。

「親分」

驚いたのは八五郎でした。

三

その晩から、ガラツ八は中江川平太夫の家に泊り込むことになりました。家が広いので、奥へは主人の平太夫、お勝手の側の居間にはお琴が一人、ガラツ八は店を直して格子をはめた表の部屋に宵からあけかた暁方までもぐり込むことになったのです。

大名の話から、お琴の噂うわさまで出た後で、ガラツ八も最初は渋りましたが、向柳原むこうやなぎわらの叔母の家に居ても、親分の平次の家に居ても、居候に変わりはないのですから、結局晩酌と御馳走と、お琴の美しさを満喫するのが景物で、少しは良い心持にウカウカと二三日過してしまいました。

それは四日目の朝。

「八、両国まで一緒に来いッ」

「応ッ」

珍しく平次に誘われた八五郎は、少し極り悪く中江川の家から飛出し、平次を追って一
気に両国まで。

「何かあつたんで？ 親分」

「広小路の酒屋へ入ったよ」

「へえ——」

「手口はいつもの通り、ひさし庇を渡つて天窓から入り、手代が一人斬られて、盗られたのは百
両ばかり」

そんな事を言ううちに、二人は野次馬に取囲まれた酒屋——ますやでんしち榊屋伝七——の前に立つ
ておりました。

「親分さん、大変なことになりました。この通り」

飛んで出たのは主人のあるじ伝七です。指さした方を見ると、庇に掛けた梯子はしご、最初はそれを
渡つて楽々と天窓をコジあげ、隣の部屋に居た手代を虫のように殺して、次の間の用筆ようだん
筒すから百両余り入った主人の財布を盗つて逃げた——と思われました。

しかし、不思議なことに、ここでも、梯子は庇に掛けたまま使った梯子はありません。
横木に少しの泥も付いてはいず、二本の脚が、柔かい土にメリ込んでもいず、梯子を掛け

た竹の古い雨樋あまどいも、少しも傷んではいなかったのです。手代は、寝たまま喉のどを刺されて、夢から死への無慙むざんな往生を遂げたらしく、凄まじい血潮の外には、何にも変ったものはありません。

「この泥棒には人間の心が無い」

平次はツクツクそう言いました。今までの手口から見て、無恥で、残酷で、手加減も遠慮もないところを見ると、どう斟しんしゃく酌して考えても、人間らしい心の持主とは思えなかつたのです。

「隣は？」

「空家でございます」

「その隣は？」

「軽業かるわざの小屋で」

「行ってみよう、八」

平次はガラツ八をさし招くと、路地を拾って、軽業小屋の裏木戸から入りました。

「御免よ、——誰か居ないのかえ」

「へエ——」

ヌツと顔を出したのは、五十年配の人摺れのした男。平次とガラツ八の顔をまぶしそうに眺めます。

「ここに誰と誰が泊っているんだ」

「へエ——」

五十男の顔から、不敵な忿懣ふんまんが消えると、それが次第に恐怖になつて行く様子です。

「俺は神田の平次だ。朝早くから気の毒だが、ツイそこに人殺しがあつたんだ。念のため小屋に泊っている男の顔を見ておきたい。皆んなここへ呼出してくれ」

「へエ——」

錢形の平次と気が付くと五十男はアタフタ小屋の中に駆け込みます。

後で解つたことですが、これが木戸番の三太さんた。その声に応じて、ゾロゾロと出て来たのは、太夫元たゆうもとの権次郎ごんじろう、竹乗りの倉松くらまつ、囃子方はやしかたの喜助きすけ、それに女が二三人、朝といつても、かなり陽ひが高くなつているのに、思い切つて自墮落な風ふうを、ズラリと裏木戸に並べたものです。

「親分さん、何かよくねえことがあつたそうで」

権次郎は四十男のしたたか額びたいを撫でて、ヒョコヒョコとお辞儀をしました。

「全くよくねえ事だよ、柵屋の手代が殺されて、百両ばかり盗られたんだが、泥棒はこの小屋の庇から、空家の屋根を伝わって、柵屋の庇へおり、天窗をコジ開けて入っているんだ」

「へエ——」

「板庇が毀れて、木端が路地に落ちているから、その見当に間違いはねえつもりだ。ところで、この小屋の庇から、隣の空家の屋根までは一間半はあるだろう、あれだけ無造作に飛付ける人間は、ここに幾人居るんだ」

「……………」

権次郎は黙ってしまいました。その後ろに蒼くなつて顫えているのは、竹乗りの名人倉松、地上三間あまりのところを庇から屋根へ楽々と飛移る芸当の出来るのは、軽業小屋の中にも、この男の外にはありません。

「倉松とか言つたね、竹乗りは鮮やかだということだが、ちよいと身体を見せてくれ」

「へエ——」

平次は、ガラツ八に眼配せすると、二人がかりで、倉松の身体を調べました。あわてて袴纏を引っかけて、襟も裾も合つてはいませんが、他には別に不審の廉もなかつたので

す。

「昨夜ゆうべ寝た場所と、お前の荷物を見せて貰おうか」

「……………」

黙って案内したのは、汚い楽屋。男達三四人はそこに雑魚寝ざごねをする様子で、まだ床も敷きつ放しですが、何の変ったところもなく、倉松の荷物という、小さい竹行李たけごうりを、引くり返して調べたところでも、着換えの裕あわせの外には何にも出て来ません。

平次はがっかりした様子で外に出ました。

四

「親分、あてが外はずれましたね」

ガラツ八、犬つころのようにその後に従います。

「外れるものか——みんな思った通りだよ」

「だって何にも証拠はないじゃありませんか」

「証拠はありすぎるよ」

「へエ——」

「たとえば、これだ」

平次は裏木戸の外のちよつと人目につかぬ物蔭しやがに踞がむと、泥と血まみに塗まれた、
振と持りつて来ました。 匕あいくち首を一ひ

「おや？ そいつはどこに？」

「溝ど板ぶの隙すきま間に打ぶち込こんであつたよ」

「それじゃ、あの野郎だ。しよつ引ひいて行いきましようか」

「待まちて待まちて、少すこし腑ふに落おちない事ことがある」

平次は元の小屋に引返すと、その匕首を皆んなに見せました。

「小屋の道具でないことは確かだ——第一、そんなによく切れるのは危なくて、舞台へ持出だしやしません。もつとも、銘々どんなドスを隠かくして持もつているか、それまでは解とりませんが——」

権次郎の言うことは一向取止めもなかつたのです。

「ここの演だし物ものに、繩な抜はけがあつたはずだが」

平次は不思議なことを訊ききます。

「それは、倉松の十八番でございますよ」

権次郎はこの上もなく無造作な調子でした。

「抜けるのは倉松だろうが、縛るのは誰だい」

「お客に縛って頂きます。——お客が引込み思案で出て下さらない時は、三太がやります
が」

「ちよいと、ここでやってみてくれ」

「へエ——」

権次郎も三太も倉松も変な顔をしましたが、錢形平次の望みに反きそむようもなく、舞台で使う細引を持って来て、木戸番の三太の手で、キリキリと倉松を縛って見せました。

「もうそんな事でよからう、抜いてみてくれ」

「……………」

倉松は何か襲われるような心持らしく、引っ切りなしに平次の顔を見ております。これが、いつ、本縄に変わるかも知れないと思うのでしょうか。

でも、二度平次に催促されると、芸人らしく、はつきり見得みえを切って、

「え——ッ」

気合が一つ、繩はゾロゾロと解けて、死んだ蛇のように、倉松の足許に這います。

「御苦労御苦労、それでいい、——とんだ邪魔をして済まなかった」

平次は、丁寧な礼をさえ言つて、小屋の外へ出るのです。

「親分」

しばらくすると、ガラツ八はたまり兼ねた様子で声を掛けました。

「何だい、八？」

「倉松の野郎を縛らないんですか」

「無駄だよ」

「？」

「繩抜けの名人だ、縛るだけが野暮さ」

「へエ——」

「それに倉松は繩を抜けるのが渡世で、縛る方は得手じゃなかったんだ」

ガラツ八は、不服そうに頬を膨ふくらせます。

「それより、あの娘の方はどうした？」

平次は話題を変えました。

「娘？」

「知らばつくれちやいけねえ。中江川のお琴さんだよ。用心棒に手前を置くのは何のため
だと思ふ」

「……………」

ガラツ八の顔は見物です。

「呆れた野郎だ、若い娘と三日も四日も鼻を突き合せているくせに、まだ埒が明かねえの
か」

「親分」

「手前は、あの娘を女房にしたいって言つたろう。だから、俺は粹すいをきかして、手前を用
心棒にしてやったのさ。中江川さんは年寄りで、眼も耳も遠いから、三日経たないうちに、
手前とお琴さんは、夫婦約束ぐらい出来るだろうと思つたんだ。——相惚れの仲人実は廻
し者——つてね、それから俺が乗出して口をきくのさ」

平次はそんな事を、面白そうにまくし立てるのです。

「だって無理だよ、親分、ああ見えても武家の娘だ」

「武家の娘が何だい、——それともお琴さんが二本差しているとでも言うのかい」

「弱つたなア」

「弱ることなんかあるものか、——どうせ年寄りには早寝だろう」

「そりや、宵には奥へ引込むが」

「それから手前へ晩酌が出るだろう、——酔った勢いで、何とかならないものかね」

「あれでも武家の娘だ。綺麗なだけで大した利口じゃあるまいと思つたが、どうしてどうして」

「手前より利口だと解つたのかい、ハツ、ハツ、ハツ、ハツ、こいつは大笑いだ」

何が面白いのか、カラカラと笑う平次。その羽目を外した調子を、ガラツ八はムツとした心持で見詰めるのでした。

五

それから三日の間に、兇賊は三ヶ所を荒らし廻りました。質屋と、呉服屋と、女隠居と、——中でも末広町の女隠居は、あんまり金を深くしまい込んで、さすがの曲くせもの者も捜し兼ねたものか、叩き起して刃物で脅おどかし、落としの中の石畳の下にあつた、百二十両の小判の

ありかを言わせてしまいました。

その時、曲者の姿を、臙おぼろげ気ながら見てしまった女隠居は、危うく殺されるところでしたが、曲者は暁あかつき近い外面おもての人通りに驚いて逃出し、すでに刃やいばを喉笛に擬せられた女隠居は、危ういところで命を助かったのです。

平次とガラツ八が、朝のうちに駆け付けて、まだ驚きと怖れから癒なり切らぬ女隠居の口から、一生懸命訊き出したことは言うまでもありません。

女隠居は、六十前後、かつては日本橋あたりの大おお店の主人の囲おい者だったそうで、下女一人を使つて、つつましく暮しておりました。

昨夜ゆうべはちようど下女を葛西かさいの在所に帰して、たった一人淋しく暮していると、夜中過ぎに、天窓をコジあけて、覆面の大男が入つて来たというのです。

「大男——？ それは本当かい」

「へエ、大きな男でございましたよ。頭ずきんを冠かぶつたままで、よくは解りませんが、声の様子ではまだ若そうで」

「下女は長く奉公しているのかい」

「五六年も居りますよ。大の忠義者で、まだ三十そこそこでしょう。一度縁付いたそうで

すが、不縁になつて私のところへ参り、もう一生動かないといつてくるくらいで、へエ」
 「葛西の在から、使いでも来たんだらうな」

「口上で、——母親が加減が悪いから一と晩泊りでも来るようにと、百姓衆が言つて来ました」

「下女の知つている人かい」

「いえ、村の人じゃない——と言いました」

こんな事は、いつまで訊ねていても際限ありません。いずれは偽使いに決つていようなものです。

「昨夜の事を、もう一度詳しく話して貰おうか」

平次は女隠居の言葉を、くり返して検討するつもりでしよう。

「子刻ここのつ（十二時）が鳴つてから寝付きましたから、丑刻やつ（二時）近かつたかも知れませんが。変な音がして眼が覚めると有明ありあけの行灯あんどんの前に、真つ黒な男が立っているじゃありませんか」

「確かに男だね」

「それはもう親分さん、——飛起きて声を立てようとすると襟えりくび頸くびを押えて枕あおむに仰向けに

押付けられ、喉笛を脇差でピタピタと叩くじやありませんか」

その時の事を思い出したか、女隠居はゾツと身を顫ふるわせました。

「何にも物を言わなかつたのか」

「——金を出せ——ただそれだけです。何にも言いません。それつきり黙りこくつて、四し半はん刻とぎ（三十分）もジツとしてるんですもの、命より惜しい虎の子だつて隠し切れるものじやありません」

奪い取られた百二十兩の惜しさが、身に滲しみみたものか、女隠居はこの時はじめてポロポロと涙をこぼしました。

「声は？」

「低い声で、——聞いたことのあるような、ないような——」

「……………」

「仕方がないから、落しの中の、石畳の下に、虎の子を隠してあることを言いました。すると、私の胸倉を掴つかんだまま行つて、落しを開けて黄八丈きはちじょうの財布に入れた、百二十兩の小判を取出し、憎らしいじやありませんか、悠々と勘定までして自分の懐に入れ、それから元の部屋に帰ると、もう一度脇差を抜いて、この私を——」

女隠居は自分の喉のあたりを指しながら、恐怖に絶句したのです。

「それから」

「どうせ、姿を見られると、決して助けてはおかない泥棒だと聞いていたので、私も観念しました。——観念したくないにも、声が出なかつたのです。思わず念仏を称とえると、泥棒はあわてて私の胸倉を突放し、蒲団ふとんの中へ私を押込んで、裏口から飛ぶように逃出してしまいました」

「外で物音でもしたのかい」

「物音がしたかも知れませんが、私には聞えません。私はもう生きた心地もなかつたので、聞落したのでしよう。泥棒があんなにあわてるところを見ると、人声か足音か、何か聞えたらに違いありません」

「時刻は？」

「間もなく丑刻半やつ（三時）だつたと思います」

「暁あけがた方かたと言つても、まだ人の通る時刻ではないな」

平次はいろいろの事を考えている様子でした。

「どうしたらいいでしょうね、親分さん。あの百二十兩を奪とられてしまつては、私はもう

明日から暮しようがありません」

女隠居は命に別条のないことをはつきり意識すると、次第に盗まれた百二十両が惜しくなったものらしく、頼み少ない姿で、悲歎にくれるのでした。

「泥棒はきつと捉つかまえてやる、——もう少し落着いて、俺の言うことを聴いてくれ」
「……………」

「泥棒の足を見なかったかい、何を履はいていたか」

「跣はだし足でしたよ。もつとも懐へ草履か雪駄せつたを入れているのがチラと見えました」

「八、聞いたか、泥棒は履物を懐ふところ中へ入れていたよ。以前は泥の付いた履物のまま、畳の上も蒲団の上も履ふみ荒らした泥棒が、この間から馬鹿にお行儀のよくなったのに、手前も気が付くだろう」

「そういえばそうですね」

八五郎は一応うなずきました。が、それはどんな意味のあることか解りそうもありません。

「ここでも梯子はしごは使わなかったようだな。ところで、お婆さん、外に気の付いたことは？」
平次はまだこの女隠居から引出せそうな気がしたのです。

「頭巾ずきんの下から、切り揃えた毛が少しはみ出していたようですよ」

「何？ 頭巾の下から、切り揃えた毛？ さア大変だ、八？」

平次は躍り上がりました。

「そいつは何でしょう、親分」

「たしかに女でないなら、そいつは総髪だ。総髪にしている男というところ——」

「医者か、八卦はっけか、法印ほういんか——」

「しめたッ」

平次は新しい光明に臨んで、驀まつ地に飛出しました。

六

神田から下谷、日本橋界隈かいわいに、総髪姿で身体の利きそうな男というと、筋違見附外すじかいみつけそとに大道易者おおたにどうけんをしている、浪人大谷道軒おおたにどうけんの外にはありません。

「八、下つ引を二三人呼んで来い、相手はうんと手剛てごわいぞ」

「大丈夫ですか、親分」

「たいがい大丈夫なつもりだが、——念のため筋違見附を覗いて行こう」
二人は一気に筋違見附へ——。

その頃筋違見附、今の万世橋まんせいばしたの袂もとは、丸ノ内、日本橋から、上野へ、甲州街道への要路で、警戒の嚴重なところであり、人出の多いところでもありました。

見附外の少し離れた空地、三脚の台を据え、天眼鏡を構えた易者は、時々編笠を取って汗を拭きますが、無精髪の総髪、まだ四十そこそこの屈強な男です。

「八、止よそう」

平次は張り切った肩を落しました。

「どうしたんで？ 親分」

「総髪は江戸に何十人あるか解らねえ、迂闊うかつにあの易者を縛って、物笑いになるのもイヤだ」

「それじゃ、あの野郎の家へ行つて、家捜ししましょうか」

「家はどこだい」

「鍋なべちよう町の源助店げんすけだなで」

「いやな事だが、それも仕方があるまいな、行つて見よう」

二人は鍋町へ引返しました。

源助店の路地の外に、ガラツ八を見張りに置いて、道軒の家へ潜り込んだのは平次たった一人。

それから一刻^{いっとき}あまり、近所の思惑^{はぼか}を憚りながら、平次は一生一代のいやな家捜しを続けました。

どこにも、血の付いた脇差も、小判の片^{かけ}らもありません。天井も、床下も、押入も、蒲団の中も見ました。

「ありませんか、親分」

ガラツ八はたまり兼ねて入って来ました。

「何にもないよ、浪人者にしては、念入りの貧乏だな」

「その仏壇は？」

「盗んだ金を、入口から見透しの仏壇へ入れて、御先祖様にお目にかける奴もあるめえ、

——が待てよ、外の考えようもある」

平次はもう一度引返すと、仏壇の中を念入りに見た上、下の抽斗^{ひきだし}も嘗^なめるように調べました。

「おや？」

抽斗を抜いて、その奥へ手を突つ込むと、何やら指先に触れるものがあるのです。ズルズルと引出してみると、

「親分」

八五郎は思わず喊^{かんせい}声をあげました。黄八丈の財布が一つ、扱^{しご}いてみると、中から出たのは、数も百二十枚、昨夜女隠居が盗られたという小判に紛れもありません。

「……………」

平次は黙って考え込んでおります。

「親分、見附へ行つてみましょう。気が付いてずらかっちゃ一大事」

「騒ぐな八、まだ縛るには早い。去年の暮から諸方で盗った金はどう積つても千両以上だ。

ここにあるのは百二十両、あとの金が出ねえうちは、滅多に縄を打つわけには行かねえ」

「だって親分」

「まあ、いい、俺に任せておけ、——この事は人に言うな」

平次は黄八丈の財布に入った百二十両を元の抽^{ひきだし}斗の裏に入れると、泥棒猫のように、そつと大谷道軒の浪宅を滑^{すべ}り出たのです。

それから二日目。

「ところで、八」

「へエ——」

平次のところへ行つた八五郎は、妙に擦くすぐつたい笑顔に迎えられました。

「あの娘はどうだえ」

「へエ——」

「まだモノにならないのか」

「ありや鑑めがね定違いですよ、親分の前だが」

八五郎は照臭く頸筋を叩きます。

「何が違つたんだ」

「あのお琴という娘はとんだ喰わせものですよ」

「はてね？」

「第一、中江川平太夫の娘なんかじやありやしません」

「へエ——」

「二三日は娘らしくしていましたが、近頃じや——」

ガラツ八は頸を縮めて赤い舌を出すのです。

「孫かい、娘でなきや——」

と平次。

「親分もどうかしていますぜ」

ガラツ八の鼻の穴は次第に大きくなります。

「何がどうしたんだ」

と平次。

「不思議なことばかりで、あつしには見当も付かねえ」

「何が不思議なんだ」

「第一、あの平太夫はそんな年寄りじやありません、髪こそ真つ白だが」

「そんな馬鹿なことがあるものか、第一ヨボヨボして、歩くさえ不自由じやないか」

「でも——」

「手前気が弱くてそんなつまらねえ事を考えるんだ。待ちな、俺が結構なまじない禁呪を教えてやる。今晚あの平太夫の前で、あの娘を嫁にくれと言ってみるんだ」

「そんな馬鹿なことが言える道理はありません。痩せても枯れても向うは武家で、こつち

はただの岡つ引だ」

「つまらねえ遠慮をするじゃないか。武家でも浪人だろう、手前は十手捕縄をお上から預かる一本立の御用聞だ」

「だって、あの娘は、あつしの事なんか、何とも思つちやいませんぜ」

「いないことがあるものか。大ありの名古屋だ、畜生奴ちくしょうめツ」

「痛いツ」

平次の手は威勢よくガラツ八の背をなぐつたのです。

「それでも文句を言うなら、結納ゆいのうの代りだとか何とか、いい加減な事を言つて、これを見せるがいい」

平次は何やら風呂敷に包んだ品を、ガラツ八に持たせるのでした。

「何です、これは」

「浦島の玉手箱だ、あけちやならねえ、——耳を貸しな、少し吞込んで貰いてえことがある」

「へエ——」

「たまには耳も掃除しておくんだぜ、いい若い者が、こんな汚い耳をしていちや、お琴さ

んだって、結構なことを囁く気にもなれないだろうじゃないか」

七

その晩中江川平太夫の家で、大変な騒ぎが起つたのです。

丑刻少し過ぎ、いつぞや平次が予言したように、兇賊が例の天窓から、二度目の襲撃をして娘のお琴を縛り上げ、部屋部屋をあさつて、店に寝ているガラツ八のところまでやつて来たのでした。

遠い有明ありあけに透かした曲者は、ガラツ八の上に馬乗りになると、脇差の一と突き。が、その手は宙に淀よどみました。何か見当の違つたものを感じたのでしよう。

「泥棒泥棒ッ」

恐ろしい声で、後ろからわめき立てたのは、床とこに寝ているはずのガラツ八です——。いや、ガラツ八は早くもこの襲撃を察し、床の中には枕と座蒲団と雑物を入れ、自分は後ろの戸棚の蔭に隠れて、神田中に響き渡るような声を出したのです。

曲者は面喰らつて立ち上がりました。が、ガラツ八の大音声だいおんじょうに胆きもを潰つぶした上、近所

のざわめき始めたのに気おくれがしたらしく、縁側の戸を開けて、パツと外の闇へ——。
「御用ツ」

そこには銭形平次が待つていたのです。

火のような格闘が一瞬庭に展開しました。曲者の脇差が、幾度か平次に迫りましたが、得意の投げ銭がそれを封じて、しばらく睨み合ううち、家の中から助太刀のガラツ八が、大音声と一緒に飛出して来たのでした。

*

大盗中江川平太夫は、平次と八五郎の手に召捕られ、その夜のうちに南の御奉行所仮牢に送られました。

娘——と称した、妾のお琴は、逐電して行方知れず。その後の取調べで、中江川平太夫は白虎の平太と異名を取った大盗賊で、三十代に傷寒を患って頭の毛は真っ白になりましたが、年はまだ四十そこそこ、ヨボヨボどころか恐ろしい体術の達人で、猿のように梁を渡り、庇を飛ぶ術を知っていたのです。

「驚いたね、親分。平太夫が泥棒と、よつぽど前から解つたんですかえ」

ガラツ八は絵解きが聞きたい様子です。

「自分の家へ泥棒が入つたと訴え出た時から解つたよ。智恵のある者は、自分の智恵に負けるのさ。あんな細工をしなきゃまだ判らずにいたかも知れないが——町内の物持が皆んなやられて、裕福と噂のある自分の家だけ無事では変だと思つたのだろう」

「あの時、どんな事がおかしかつたんで？」

「家の中に泥の足跡のなかつたのを第一番に気が付いたよ。自分の家に泥足で入るのはイヤだろうし、それに引窓は内からこわしたんだから、梯子にも及ばなかつたんだ——俺がそれに気が付くと、あの後で入つた家へは泥の足跡を付けないように用心した上、梯子を一度も使わなかつた」

「へエ——」

「お琴を縛るのに、寝巻の上へ^{あわせ}袷を羽織らしたのもおかしい。^{かば}庇いすぎたんだ。それから縄の結び目は、植木屋や仕事師や、船乗や、岡っ引じやない、あれは小道具の方から来た武道の伝授物だ」

「へエ——」

「俺に泊つてくれと言うのを幸い、手前を泊めたのは、それとなく二人の間を見張らせるためさ。平太夫がそんなに年寄りでないことや、あの女は娘でないことも俺は気が付いていたよ」

「……………」

「俺に疑われたと思うと、手前に寝酒をあてがった後で家を脱け出し、両国の酒屋に押入つて、竹乗りの倉松に疑いを被せたり、女隠居にわざと素足や総髪を見せて、とんでもない方へ疑いを外らせる工夫をしたのさ。あの女隠居はなかなか確り者らしいが、その確り者が命がけで耳をすましていて聞えない物音を、曲者だけが聞いて逃出すはずはない。あわてた振りをして女隠居を殺さなかったのは、後でいろいろ喋舌つてもらいたかったからだ」

「……………」

「一度は易者の大谷道軒を疑わせたが、どんな馬鹿でも、前の晩盗んだ金を、戸締りもない家の仏壇の抽斗ひきだしに隠すはずはない」

「あの晩、お琴を嫁に欲しいと言わせたのは？」

「平太夫も近頃少し気をもんでいると解ったからだよ。何しろ八五郎といういい兄さんが、

女の側に居るんだからね」

「冗談でしょう」

「ガラツ八も少しは極りが悪そうです。」

「いや、冗談じゃない。髪の毛の白い弱みで、それくらいのこととはあつたはずだ」

「あの包の中は？」

「黄八丈の財布と、手代を刺したあいくち首と、お琴を縛った細引の結び目と、——それから毛の先を切ったかもじさ、それを頭巾の下にかぶ冠つて総髪に見せたんだ」

「どこからそんなものを」

「一度使った物を、あれほどの悪党が持っているはずはない。いずれはどこかへ捨てたに違いないと思つたから、かもじ屋から新しく買つて来て、ちよいと先を切つて間に合せたのさ」

「へエ——」

「ガラツ八も開いた口がふさい塞がりません。」

「あの晩、いつもの通り飲んで寝ちや、手前の命はなかつたはずだ、——だから、悪いこととは言わねえ、武家の娘などに思いをかけるより、煮売屋のお勘子で我慢しておくのさ、

その方が命だけでも無事だぜ」

「へッ」

ガラツ八は苦笑いをして、ピシヤリと額を叩きました。

「煮𦵇を腹一杯食つてよ、町内のお湯を買い切つて三日ばかりつかつてみねえ、こいつは大名にもない贅^{ぜい}だぜ」

平次はそう言つて、カラカラと笑うのです。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（六）結納の行方」嶋中文庫、嶋中書店

22004（平成16）年10月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話」中央公論社

1939（昭和14）年

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1938（昭和13）年6月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2018年12月24日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

八五郎の恋

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>